

彼女と出会ったのはある神社だ。

鳥居を抜ければ石畳を敷き詰めた道が、がどつしりした構えの拝殿まで延びている。

誰とも目を合わせないよう俯いて歩き、お賽銭箱の前にたずんで申し訳に手を合わせる。一応礼儀としてやつてるだけで心は入っていない。

神様はあんまり信じない。よそ見ばかりしているから。

拝殿を回り込んで裏へ行くと、そこからさらに奥へ細道が続いていた。こちらは人氣がなくて寂しい。周囲には木が鬱蒼と生い茂り、昼なお暗い日陰ができている。

かくれんぼで忘れられた子がいるような場所だな、と素朴な感想を抱く。子供の頃、私は最後まで残される子供だった。必ず皆においてかれる鈍くさい子だった。

だから、拒めなかつたのだろうか。

ヒンヤリ陰った道が至る場所には小さな祠があり、あどけない顔のお地藏様がたずんでいた。赤い涎かけが鮮やかだ。祠には子供用のジュースやぬいぐるみに人形、沢山のおもちゃがお供えされている。

お供え物に埋もれたお地藏様と相対し、今度こそ心をこめて手を合わせる。

おやすみなさいなんていうのは自己満足だ。あの子が安らかに眠れるはずがないじゃないか、私が殺したんだから。コツリと音が響く。硬質なヒールの靴音に振り向けば、三十後半とおぼしき綺麗な女性が立っていた。神社にはちぐはぐなパンツスーツを着こなし、見るからにデキるキャリアウーマンといった印象……私とは縁のない人種だ。

ボーイツシユなショートヘアが卵形の輪郭と整った目鼻立ちを引き立てている。

「ごめんなさい、驚かせちゃった？」

「……別に」

「お隣いいかしら」

「ええ、まあ、はい。お好きにどうぞ」

変な人。

ここがどこか知った上で先客に声をかける神経は理解に苦む。

気さくすぎる態度とはきはきした物言いに調子が狂い、場所を譲る。

隣に来た彼女は軽く目を瞑り、蝶を手のひらのくぼみに閉じ込めるような、優雅な仕草で手を合わせた。

「妙な成り行きにだ。やつぱりこなければよかつたかも。落ち着かずに視線をさまよわせ、ボロいスニーカーの先端を見詰める。私たちは肩を並べ、しばらく無言で、いるかもわからないあの子たちに手を合わせた。

「……ねえ」

彼女がゆるやかに薄目を開き、私へと一瞥よこす。

「ここ、外国で死んだ子もいいのかしら」

予想外の質問にたじろぎ、足りない頭で必死に考える。結果、出てきたのはなんとも頼りない答えだった。

「さあ……いいんじゃないですか？ 体から出ちゃつたらどこ行こうが関係ないでしょ、お母さんがいる国に帰つてくるんじゃないかな」

「そうか。そうよね」

自分に言い聞かせるように頷き、彼女がハンドバックから

取り出したのは、子供が大好きな乳酸飲料だ。母が配達をしてたから私も小さい頃はよく飲んだ。大人になつてからはめつきりご無沙汰だけだ。

「ぬるくなつちやつてごめんね。常温でもおいしいから」
謎の言い訳をして乳酸飲料の容器をお地藏様の足元に立てる。